

平和文化研究 第38集 (2017年度)

谷口稜曄さんを偲ぶ

高橋 眞司

Cover Artwork: Seiryō Ikawa

長崎総合科学大学
長崎平和文化研究所

谷口稜曄さんを偲ぶ

高橋 眞司

目次

まえがき	35
（写真）「赤い背中」の少年	36
本文「谷口稜曄さんを偲ぶ」	36
（写真）「赤い背中」の白黒写真	36
「赤い背中」の名刺	37
【注】	39

まえがき

2017年11月18日、紅葉と銀杏の色づく晩秋の長崎で、「谷口稜曄さんを偲ぶ会」が開催された。会場は、東山手のグラバー園、大浦天主堂からほど遠からぬホテルニュータンダにおいて、であった。長崎被災協（長崎原爆被災者協議会）主催の「偲ぶ会」には、去る8月30日、88歳で亡くなった谷口稜曄（たにぐち・すみてる、1929—2017年）さんのご遺族、谷口英夫氏ご夫妻をはじめ、日本被団協の役員、地元の被災協ほかに所属するご高齢の被爆者、「被爆二世の会」の役員と会員、高校生平和大使、多士済々の平和活動家、そして新聞・テレビの報道関係者らが参集して、会場は溢れんばかりであった。（以下、敬称を略したところがある。）

ところで、わたくしの《長崎にあって哲学する》三部作（北樹出版、1994, 2004, 2015年）には、「間奏曲」と称して、あるいは一編を捧げて、長崎で出会った人々、たとえば、秋月辰一郎、石田忠、岡正治、鎌田定夫、故・永井隆、本島等についての文章が見出される。また、本文中には、岩松繁俊、瀬戸口千恵、肥田舜太郎、山田かん、山口仙二、さらには、海外の著名人、たとえば、R.J. リフトン教授、

J. サマヴィル教授、J. ロートブラット博士、J. ガルトゥング教授、H. コルディコット医師、ピーター・タウンゼンド氏、ケイト・デュースさんなど、わたくしが長崎で出会った、あるいは長崎のゆかりで出会った人々の名前も見出される。「長崎は出会いの場所である。自分自身と出会えば誓いの場所となる」という所以（ゆえん）である。

以下にかかげる文章は「谷口稜曄さんを偲ぶ会」に寄せたみじかいメッセージに、ことば足らずのところを補って、ややくわしい「注」を付したものである。この文章も、昨年の小文「被団協とわたし—石田忠《総括表》をめぐって」（『平和文化研究』第36-37集、2017年3月）と同様、《長崎にあって哲学する》の「間奏曲」の一環としてお読みいただければ幸いである。

（写真）「赤い背中」の少年—谷口稜暉



撮影者：アメリカ合衆国海兵隊写真班

ジョー・オダネル(Joe O'Donnell)

撮影日時：1946年1月31日

撮影場所：大村海軍病院

写真出典：Sumiteru Taniguchi. Wikipedia,
the free encyclopedia.

Retrieved 15 December 2017.

本文 「谷口稜暉さんを偲ぶ」

核兵器廃絶運動のなかで、谷口稜暉さんは、山口仙二（1930—2013年）さんと共に、もっともよく知られたナガサキの被爆者である。とくに、2010年、ニューヨーク、国連本部でのNPT再検討会議において^{（注1）}、さらに2015年4月にはNGO諸団体による「核兵器のない平和で公正な持続可能な世界をめざす国際平和地球会議」において、「赤い背中」（“bright red back”）の写真をかかげ、自らの裸身をさらして原爆の非人間性を訴え、核兵器の廃絶を訴えた谷口さんの姿は、世界中の心ある人々の眼と胸に焼きついている。

わたしは谷口さんを勤務する大学の新入生講話にお招きしたり、わたしの担当する授業にお呼びしたことがある。長崎被災協を訪ねて、個人的にインタビューを試みたこともある。その折りには、被爆後の白黒の貴重な写真や「赤い背中」の写真を裏に印刷した名刺など四枚の写真を頂戴した。ここには、そのうち二枚の写真をかかげる^{（注2）}。

（写真）「赤い背中」の白黒写真



撮影者：ジョー・オダネル

撮影日時：1945年9月15日

場 所：新興善特設救護病院
（撮影日は谷口氏の教示による）

ていることを洞察する。

被爆後の生活のきびしさは、谷口さんを口数の少ない人にしたようである。しかし、口数が少なく寡黙になるにつれて、その存在はますます大きくなっていった。この件についても忘れられない思い出がある。ある夏のこと、私が司会をつとめたシンポジウムがあり、谷口さんも討論者の一人として発言をされた。シンポジウムが終って、ことばを交わしていると、じつは、このシンポジウムに参加するために谷口さんは特別に院長の許可をえて、病院から抜け出してきたのだという。谷口さんはそのように寡黙であった。

晩年には、公的な会議で同席することもしばしばあったが、ほとんど発言するのを聞いたことがない。しかし、ひとたび発言を求められれば、一座の、あるいは満場の人々を厳粛ならしめ、感動と感銘を与えずにはおかなかった。冒頭でふれたNPT再検討会議とその関連行事における「赤い背中」の写真を掲げての発言がそうであったし、2015年の長崎平和祈念式典における「平和への誓い」もそうであった。

被爆者代表として谷口さんの読み上げた「平和への誓い」は、「世界で唯一の戦争被爆国」といいながら、「憲法改正を推し進め」、アメリカ合衆国の「核の傘」の下に入って、「核兵器禁止条約」には一貫して背を向けつづける安倍晋三首相を面前において、その政権の姿勢を真正面から毅然として批判したものであった。

「私はこの70年の間に倒れた多くの仲間の遺志を引き継ぎ、戦争のない、核兵器のない世界の実現のため、生きている限り、戦争と原爆被害の生き証人の一人として、その実相を世界に語り続けることを、平和を願うすべての皆さんの前で心から誓います。」^(注9)

平和祈念式典会場の内と外で、谷口稜暉さんの苛酷な被爆体験に根差した核兵器廃絶の決意とその勇気をたたえる共感の拍手は、ひととき強くうち鳴らされた。

谷口さんは、同年2015年の春、ニューヨークで開催されたNGO主催「国際平和地球会議」でのスピーチを「被爆五十周年・私の遺言」^(注10)にもとづいて、次のように結んでいた。

「私はモルモットではない。もちろん見せ物ではない。だが、私の姿を見てしまったあなたたちは、どうか目をそらさないで、もう一度よく見てほしい。私は奇跡的に生き延びたが、今なお私の全身には原爆の呪うべき爪跡があるのです。

私は、じっと見つめるあなたの目の厳しさ、あたたかさを信じたい。核と人類は共存できない。私が歩んできたような、こんな苦しみは、もう私たちだけで沢山だ。私たちの娘や息子たちは平和に豊かに生きて欲しい。そのためにみんなで最大の力を出しあって核の無い、真の平和のために頑張してほしい。

人間が人間として生きて行くためには、地球上に一発たりとも核兵器を残してはなりません。私は核兵器がこの世からなくなるのを見届けなければ安心して死んでいけません。

長崎を最後の被爆地とするために。

私を最後の被爆者とするために。

核兵器廃絶の声を全世界に。

ノーモア・ヒロシマ！

ノーモア・ナガサキ！

ノーモア・ヒバクシャ！

ノーモア・ウオー！

2015年NGO「国際平和地球会議」における、万雷の拍手を受けたこの演説の最後の四行「ノーモ

アヒロシマ！ノーモアナガサキ！ノーモアヒバクシャ！ノーモア・ウオー！」は、じつは、1982年、日本被団協代表委員・山口仙二さんが日本における反核の世論と日本被団協を代表して、「第2回国連軍縮特別総会」(SSD-II)において発言したスピーチ^(注1 1)の最後の部分と正確に照応している^(注1 2)。つまり、谷口稜曄さんは、長崎被災協の同僚であり親友であり、谷口さんを被爆者運動に誘った故・山口仙二さんの遺志を引き継ぎ、さらに言えば、日本の被爆者のみならず、全世界のヒバクシャ、すなわち、核実験の被害者ならびに原発事故の被害者を含むあらゆる「核暴力」^(注1 3)の被害者と共に、手をたずさえ、声をそろえて、この歴史的演説を結んだのであった。つねに冷静・沈着であった谷口稜曄さんの目に泛(うか)んだあの涙は、その深い思いを伝えるものであった。

谷口さんが「死の床」にあった2017年7月7日、国連本部において、歴史的な「核兵器禁止条約」が採択された。そして、それは、“ICAN”(核兵器廃絶国際キャンペーン)の「ノーベル平和賞」の授賞式で、ヒロシマの被爆者、サーロー節子(Setsuko Thurlow, 1932-)さんが述べたように、「核兵器の終りのはじまり」(the beginning of the end for nuclear weapons)にしなければならない。谷口さんはそれを見届けるかのように、8月30日息を引き取った^(注1 4)。

葬儀の日、柩(ひつぎ)のなかの谷口稜曄さんの、苦難の人生から解き放たれた荘厳、崇高な顔をわたしは永遠に忘れることはないであろう。

【注】

(注1) 本文中で言及した谷口稜曄氏の講演(NPT再検討会議, 2010年; NGO主催「国際平和地球会議」2015年; 長崎平和祈念式典における「平和への誓い」2015年)は、いずれもYouTubeで視

聴できる。また、朝日新聞長崎総局の若い記者らによる『祈りーナガサキ・ノート』(朝日文庫、2010年)は、その最終章「ニューヨークへー2010NPT再検討会議」で、「赤い背中」の写真を掲げる谷口稜曄氏の演説の歴史的文脈と趣旨をよく伝えている。

(注2) 谷口稜曄さんがわたくしに託して下さった四枚の写真の内、二枚をここに掲げた。掲載にあたって長崎原爆資料館の許諾を得たことを感謝したい。あとの二枚は、中年期以後の「赤い背中」(カラー)と胸部(モノクローム)の写真であるが、撮影者の氏名不詳のため、掲載を見合わせた。

(注3) 後年の谷口さんの背中と胸部を痛々しいままに写し撮った写真に、黒崎晴生氏のものがある。長崎原爆被災者協議会、日本リアリズム写真集団長崎支部『写真集 長崎の証言 THE TESTIMONY OF NAGASAKI』被災協発行、1970年、および黒崎晴生『写真集 ナガサキ・傷痕癒えぬまにー一苦悩の50年を生きて』昭和堂印刷、1995年、40-41ページ参照。

なお、インターネットの検索エンジンに、“Sumiteru Taniguchi, bright red back” ほかを入力すれば、谷口さんの赤い背中と胸部に関して、他にも多くの画像を見ることができる。

(注4) わたしのお気に入りにはバーバリー(Burberrys)の三つ揃いの鮮やかな青いスーツがあった。まだ若いころ、オクスフォード大学エクシター・コレッジで研修中、アメリカの一人から「ゴージャス(gorgeous)」と言われたことがある。服飾について「ゴージャス」と言われたのは、長い人生でただ一回かきりであった。その愛着のスーツも中年になると、もう身につけることができなくなってしまった。

(注4b) 「偲ぶ会」当日の朝長万左男医師のスピーチから。なお、「原爆による人間の殺傷」については、朝長万左男「長崎の原爆被害ーその身体的・心理的影響」に簡潔な記述がある。高橋眞司・舟越耿一編『ナガサキから平和学する！』法律文

化社、2009年、所収。

（注5） 第二次世界戦争中イギリス空軍の英雄であり、その後、わたしの少年時代、イギリス王室マーガレット王女の悲恋の恋人としても知られた、作家ピーター・タウンゼンド氏の書きしるした「谷口稜暉ものがたり」は「ナガサキへの愛」にあふれた推奨すべき読み物である。それはまた、稜暉さんと栄子夫人の馴れ初めとその後についても、もっともくわしく彼女の「勇気」と人間的なあたたかさについて。Peter Townsend, *The Postman of Nagasaki: The True Story of a Nuclear Survivor*. Collins, 1984; Penguin Books, 1985; ピーター・タウンゼンド『ナガサキの郵便配達』間庭恭人訳、早川書房、1985年。なお、わたしの手元にある「谷口稜暉」の署名入りの上記二冊は、刊行後まもなく谷口さんご本人からいただいたものである。

また、新婚旅行の夜に、はじめて「赤い背中」を見た新妻が泣きつづけたこと、しかし、だからこそ、稜暉さんのことは「私が面倒見てやらんば」と悟ったことなど、久（ひさし）知邦記者の記述も長崎弁で真実を書きとどめている。久知邦『谷口稜暉聞き書き—原爆を背負って』西日本新聞社、2014年。

（注6） Robert J. Lifton, *Death in Life: Survivors of Hiroshima*. Random House, 1967, pp. 489-499. なお、わたしの手元には上記初版のほか、Basic Booksなどの諸版があるが、それらのページづけは、ペリカン・ブックスを除いて、すべて同じである。ロバート・J・リフトン『死の内の生—ヒロシマの生存者』梶井廸夫監修、湯浅信之、越智道雄、松田誠思訳、朝日新聞社、1971年、446-458ページ; 梶井廸夫、湯浅信之、越智道雄、松田誠思訳『ヒロシマを生き抜く—精神史的考察』岩波現代文庫（上下2巻、2009年）下巻、301-326ページ。なお、文庫版には、著者リフトンが「本書は被爆者の英知を世に広めるために書かれた」と、新しい序文を寄せている。また下巻には短いがすぐれた解説を田中利幸が寄せている。

ただし、岩波現代文庫版の副題については注釈が必要であろう。「精神史的考察」というときの「精神史」は、ドイツ語でいう“Geistesgeschichte”、あるいは英語の“intellectual history”ではない。それはリフトン自身の言葉では、「サイコ=ヒストリカル・アプローチ（“psychohistorical approach”）を用いた考察というのである。それは“Ψυχή, psychē”（プシュケー：氣息、精神、魂、心）の発達と病理の歴史的側面を重視する研究という意味である。すなわち「精神=歴史研究的」方法、あるいは「心理・歴史的」方法と訳すことも可能であろう。フロイトの「精神分析学“Psychoanalyse,” or “psychoanalysis”」を方法として用いた点では、エリク・H・エリクソンと共通するが、エリクソンが「サイコ=ソーシャル・アプローチ（“psychosocial approach”）」を打出して、「アイデンティティ(The Problem of Ego Identity, 1956)」や「ライフ・サイクル(The Human Life Cycle, 1968)」など、斬新かつ重要な概念を産み出したのに対して、リフトンはフロイトの「精神分析学」を、中国革命の「洗脳」や文化大革命、ナチのホロコースト、そしてヒロシマ・ナガサキの原爆体験など、20世紀最大の歴史的事象に適用して発展させることを意図したのである。フロイトの「精神分析学」を応用し発展させるにあたって、エリクソンが社会性を重視したのに対して、リフトンは歴史性を重視したともいえる。その意味で、リフトンは「精神=歴史研究“psychohistory”」の発展に重要な貢献をしたといえることができる。この点については、リフトンの第一論文集(*History and Human Survival*. Random House, 1970.)の序論“On Becoming a psychohistorian”）、ならびに高橋眞司『続・長崎にあって哲学する—原爆死から平和責任へ』第3編、第3章、133ページ、注(4)参照。

（注7） この「慈愛(charité)」のころころというのは、パスカルの有名な「三つの秩序」(les trois ordres)、すなわち、点と線と面のように、次元を異にする「肉体(le corps)」と「精神(l' esprit)」と「叡智(la

sagesse)」のうち、もっとも高い次元の「叡智(la sagesse)」の秩序に属する、とすることができる。それは、比喻を用いていえば、王侯貴族の豪華絢爛と高位顕官の勲功といえども科学者・哲学者の厳密高尚な知識に及ばず、さらに後者といえども、たとえばマザー・テレサと「神の愛の宣教師会」(Missionaries of Charity, 1950-)による貧しい子どもや死にゆく人びとに対する優しい心づかい、すなわち慈愛(charité)に及ばない、それどころか、そもそも比べものにならない、ということである。

Blaise Pascal, *Pensées et Opuscules*, par M. Leon Brunschvicg. Classiques Hachette, Section XII, Fragment 793, pp. 695-697; 『パスカル瞑想録(パンセ)』由木康訳、白水社、1938年、428-431ページ; パスカル『パンセ』前田陽一・由木康訳、中公文庫、1973年、断章番号793、524-527ページ参照。

なお、この「慈愛(charité)」について、ジャック・シュヴァリエが校訂したプレイアード版全集と邦訳「パスカル全集」とで当たりたい方のために、以下の書誌を添えておこう。Pascal, *Pensées*, Fragment, 829. *Oeuvres Complètes*. Edition, établie par Jacques Chevalier. Bibliothèque de la Pléiade, 1954. pp. 1341-1342. 田辺保訳、パンセ I、『パスカル著作集』第6巻、教文館、1981年、432-436ページ。

(注8) ここで「憐憫の情」というとき、わたしはルソーの「憐憫」(pitié)を思い浮かべている。ルソーはかれの『社会契約論』(1762年)に先立つ『人間不平等起源論』(1755年)において、「憐憫の情(pitié)は、あらゆる反省に先立つ普遍的な、有用な徳であり、禽獣でさえも有する自然的な徳である」と述べ、「憐憫が一つの自然的感情であることは確実である」と言っている。Jean Jacques Rousseau, *Discours sur l' Origine et les Fondements de l' Inégalité parmi des Hommes*. *Oeuvres Completes* III. Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1964, pp. 154-155; ルソー『人間不平等起源論』本田喜代治、平岡昇訳、岩波文庫、1957年、66-69ページ; ただし、原好男訳『ルソー全集』第4巻(白水社、1978

年、222-224ページ)では「憐れみ」と訳されている。

なお、この「憐憫の情(pitié)」をもって、ルソーが「自然状態は戦争状態である」と結論づけたホッブズの人間観と自然状態を鋭く批判したように、わたしはこれをもってリフトンの「死の罪意識」に異議申し立てをする。ナチ・ホロコーストの生存者やヒロシマ・ナガサキの被爆者においては、死と罪意識を「分かちがたいもの」(inseparability)として捉え、「死の罪意識」(death guilt)を「拭い去ることのできないもの」(indelible)とネガティブに捉えたリフトン(Death in Life, 1967: 495, 499)に対して、「死の罪意識」のうちに、「慈愛のころ」や「憐憫の情」を認める考え方は、「死の罪意識」をよりポジティブな、人間的なものとして捉えた石田忠の考え方に与(くみ)するものでないかと思う。つまり、原爆で傷つき死にゆく人びとを見捨てて逃げた、見殺しにしたというとき、いきなり「罪意識」に結びつけるのではなく、その前に、谷口稜曄氏のぼあいにおいて明瞭なように、ここには打ち消しがたい人間的な「慈愛のころ(charité)」や「憐憫の情(pitié)」があって、その後に「罪意識」(guilt feeling)が来る、というのである。リフトンの画期的な著述の出版(1967年)から半世紀後の一つの問題提起として、ここにあって提出しておきたい。

(注9) 「被爆者代表の平和への誓い」、『朝日新聞』、『長崎新聞』、『読売新聞』など新聞各紙、2015年8月10日。これは朝日新聞社のデータベース「聞蔵Ⅱビジュアル」ほか、新聞各社のデータベースによって容易に検索できる。

(注10) 「被爆五十周年・私の遺言」、原爆被災者協議会編集・発行『いのちの証—I. 原爆被害と被爆者』1995年、147ページ。なお、本書の冒頭に、わたくしも「原爆死とは何か—原爆死と原爆死以後」を寄稿している。

(注11) 山口仙二が「第2回国連軍縮特別総会」(SSD-II, 1982)において発言したスピーチの

英語版、ならびに日本語版はいかの通り。

Senji Yamaguchi, “No More Hiroshima, No More Nagasaki”. Appeals from Nagasaki. Edited by Shinji Takahashi. Circulated in Manuscript since 1985 and published by Nagasaki Association for Research and Dissemination of Atomic Bomb Survivors’ Association. 1991; 山口仙二「再び核戦争の地獄を許すな」、長崎原普協（長崎「原爆問題」研究普及協議会）編集・発行『SSD I・II・III—長崎からの訴え』1993年、27-31ページ。

（注12） 谷口稜曄は山口仙二のこの国連演説（1982年）を「忘れてはいけない」ものとして語り継いでいた。久知邦、前掲書、168ページ。

さらにさかのぼれば、結び四行の、初めの三行「ノーモアヒロシマ！ ノーモアナガサキ！ ノーモアヒバクシャ！」の訴えは、1978年、ジュネーヴで開かれた NGO 軍縮国際会議の開会総会において、長崎の被爆者・渡辺千恵子が行なった演説「核のない世界を一日も早く」の結びに置いた訴えであった。鎌田定夫編『ナガサキの証言』青木書店、1979年、229ページ。谷口稜曄もジュネーヴにおけるこの開会総会に出席していて、渡辺千恵子の「力強い訴え」をその場で聞いていた。久知邦、前掲書、158-160ページ。

（注13） 「核暴力」の語によって、私は核兵器と核発電、すなわち原発（原子力発電）の二つを意味している。それらを一括して「核暴力」(nuclear violences)と呼ぶのである。英語の抽象名詞(violence)をあえて禁則を犯して複数形(violences)にして、語尾の“s”をイタリクスにしたのは、核暴力には二種類あることを強調するためであった。高橋眞司『長崎にあつて哲学する・完—3・11後の平和責任』北樹出版、2015年、270, 273, 324-325ページ参照。

（注14） 国連で「核兵器禁止条約」が採択される直前に、谷口稜曄さんが語った最後のビデオ・メッセージがある。それは YouTube「長崎の被爆者・谷口稜曄のラストメッセージ」で視聴できる。

ここで谷口さんは「私たち被爆者が、もし一人もいなくなった時に、[核廃絶をめぐる国際情勢が]どんな形になっていくのか、それがいちばん怖い」と、「死の床」から、最後の最後まで、警鐘を鳴らしつづけた。